

怪帰師のお仕事②

きとう 佐東みどり・作

覆^{フクレ}のと・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ

第1話 白い帽子の女

琴葉と光一郎	6
目撃された怪	18
二人の動画配信者	30
怪のいる場所	39
もう一人の怪	47
母親の気持	56



第2話 不幸の予言

たぬ吉の知り合い	69
くだんの願い	80
不幸を回避せよ！	89
夏純に関する予言	102
暴走するくだん	116



第3話 もう一人の怪帰師

雑木林にひそむ者	130
笑顔の教室	140
支配された町	152
少年と光一郎	162
怪との交渉	171



あとがき	192
------	-----



さい じょう こ え
最上湖江

こういちろう
光一郎の
もとつやくこう ほ
元通役候補で、許嫁。

せ と ゆ か り
瀬戸由香里

こと ば
琴葉たちのクラスの学級委員長。
えい かく
絵を描くのが好き。

もり なが か すみ
森永夏純

こと ば しん ゆう
琴葉の親友で
は や つよ
流行りものに強い。
と しん せん せつ うわさ す
都市伝説や噂が好き。

は っ と り か す や
服部和也

クラスのムードメーカー。
あか げん き うん どう しん けい ば つ ぐ ん
明るく元気で運動神経抜群。

あま くさ こう いち ろう
天草光一郎

てん こう せい
クールでイケメンな転校生。
かい もと ば し ょ か え
怪を元いた場所に帰す、
かい か え し し こと
怪帰師という仕事をしている。

と お の こと ば
遠野琴葉

あか げん き しょうがく ねんせい
明るく元気な小学6年生。
と ても や さ し く、 正義 かん づよ
とてもやさしく、正義感が強い。
つう や く し こと すこ
通役の仕事に少しずつ
な
慣れてきたけど……

登場人物

き ち
たぬ吉

えき まえ い さ か や み せ さ き
駅前の居酒屋店先にいる、
し ら せ や き か い ふ る
信楽焼の怪「古ダヌキ」。
こと ば こういちろう そうだん あいて
琴葉や光一郎のよき相談相手。

第1話 白い帽子の女

琴葉と光一郎

（ほんとに、どうすればいいんだろう）
日曜日。小学六年生の遠野琴葉は自分の部屋にいた。
テーブルの上にはノートが置かれ、算数の問題が書かれている。
琴葉はテーブルの前に座り、明日行われる小テストのための勉強をしていたのだ。
しかし、持っている鉛筆は先ほどからまったく動いていない。答えがわからないのではない。そもそも問題すらちゃんと見ていなかった。

すべては先日たぬ吉が言った、あの名前のせいである。
たぬ吉は、琴葉の住んでいる町に古くからすむ古ダヌキの怪だ。人々に迷惑をかけるこ



となく、怪婦師にも協力している。天草光一郎のことも昔から知っているようだ。

そんなたぬ吉が言うには、光一郎はこの町に来たとき、落ち込んでいたとのこと。怪婦師である光一郎の相棒となるはずだった通役候補と何かがあったせいらしい。

そしてそれは光一郎の幼なじみの女の子だった。

彼女の名は、最上瑚江。

(何があったんだろう……)

琴葉はたぬ吉にその理由を聞こうとしたが、「それ以上くわしい話は、わたの口からは言われへん」と言つて教えてくれなかった。

(光一郎くんに直接聞ければいいけど……)

琴葉はそう思いながらも、すぐに首を横にブンブンと振る。

そんなことできるわけではない。

「だって、彼女は光一郎くんの——」

「僕の、どうしたんだい？」

「え、あつ！」

その声を聞き、琴葉はハツとなった。

琴葉のとなりには、白い肌に大きく澄んだ目とシュツと通った鼻筋、りりしくて綺麗な唇を持つ少年が座っていた。

サラサラとした銀髪の髪を揺らしながら、琴葉をのぞき込むように見ている。

この少年が光一郎だ。

「ええつと、あの」

「さつきから全然問題を解いてないけど、僕の説明はやっぱり下手かな？」

「え、あ、うん。上手！ 大山先生の十倍、ううん、百倍わかりやすいよ！」

琴葉はあわてて笑顔を作つてそう答えた。

光一郎は琴葉が算数を苦手だと知つて、勉強を教えるよと言つてくれたのだ。運動神経もいい上に、勉強もできる。

少し頼りないところもあるけれど、見た目も性格も完璧すぎるほど完璧だ。

(そんな光一郎くんが、わざわざ日曜日に家に来てくれたのに)

琴葉は瑚江のことばかり考え、まったく集中できない自分が情けなくなった。

そのとき、部屋のドアが開いた。

「こんにちは」



「琴葉の母親が、ニコニコしながら部屋に入ってきた。」

「光一郎くん、さあ、ジュースを飲んで。お菓子もあるわよ。チョコとおせんべいどっちがいい？」

母親は笑顔で光一郎に近寄る。

「ちよつと、お母さん！」

「琴葉は、光一郎をかばうように母親の前に立った。」

「琴葉、そんなところに立つたら光一郎くんが見えないじゃない」

「見る必要ないでしょ」

「どうして？ 娘のボーイフレンドをチエツクするのは母親の義務でしょ」

「ボボボボボーイフレンド???」

「琴葉は顔を真っ赤にすると、母親に迫った。」

「光一郎くんは、ただのお友達だから」

「またまた、そういうのはいいから。お父さんもちゃんとチェックしろよって天国で言ってるはずよ」

「そんなの言っていないし！ いいから出て行って！」

「琴葉は母親の背中を押すと、部屋の外へ追い出した。」

「ああ、ジュースとお菓子——」

「さっき私が用意したのがまだあるから！ ほら、外に出て！」

「琴葉は母親を部屋の外に完全に追い出し、ドアを勢いよく閉めた。」

「まったくも——」

「琴葉ちゃんのお母さん、いつもあんな感じなのかい？」

ふと、光一郎が尋ねた。

「お父さんが亡くなってから、ますますひどくなったかも」

「三年前に亡くなった父親はいつも琴葉を優しく見守ってくれた。」

けれども、母親は正反対だ。

「お父さんは、さつきみたいにズカズカと部屋に入つて来ることなんかなかったし、ああいうデリカシーのないこと言わなかったもん」

琴葉は母親のそういうところがちよつぱり苦手だった。

「ほんと、お母さんつてどうしてあんななんだろう」

それを聞いた光一郎がほほ笑みながら答えた。

「僕は、琴葉ちゃんのお父さんもお母さんも、素敵な人だなんて思うよ」

「お母さんも？」

「ああ。僕は親とあんな風に親しくはなかったから」

「光一郎くん……」

光一郎の一族は代々怪師をしていて。

彼が実家でどのような生活をしてたのかは聞いたことがない。

それでも、電話のやり取りを見ている限り、光一郎の父親は厳しそうな気がした。母親も厳しい人なのかもしれない。

（それに、光一郎くんは、今ひとり暮らしだもんね）

この町に来たのも、怪を元の世界に帰し、怪師として父親に認めてもらうためだ。

（光一郎くんが認めてもらえるために、私も力にならないと）

怪の多くは人間の世界に現れると、人々に災いを与える。

違う世界の存在であるため、人間がいくら攻撃してもダメージを与えられない。そこで、怪を元の世界に帰す怪師という仕事が生まれた。

怪師は怪と交渉し、元の世界に帰ってもらうのが役目だ。そのためには怪が帰るのを納得する『願い』や『条件』を聞き出し、かなえる必要がある。

けれど、怪師は怪を元の世界に帰す『光の扉』を開く力はあるても、怪の言葉はわからない。そこで、怪の言葉がわかる『通役』の存在が必要となる。

琴葉はその通役として、光一郎の相棒になったのだ。

（だけど……）

琴葉は、先ほど思わず口に出した言葉を思い出した。

彼女は光一郎くんの――

光一郎が住む家には、写真立てがあった。

そこには光一郎と、通役になるはずだった幼なじみの瑚江が一緒に写っていた。

そんな瑚江に何かが起こり、彼女は光一郎の通役にはならなかった。

その理由を知りたい。でも、光一郎には聞けない。

(だって、最上さんは光一郎くんの――、許嫁だから)
琴葉は沈痛な表情になると、小さくため息をついた。

「どこか、わからないところがあるのかい？」

光一郎が、琴葉にそう言う。

「えつ、あ……」

光一郎は、琴葉が算数の解き方がわからず悩んでいると思っ
ているようだ。

「そうじゃないよ。そういうことじゃないんだけど……」

それ以上は、やはり何も言えない。

琴葉は勉強に集中できないまま、ノートに書かれた算数の問題を力なく見つめるのだ
った。

その頃。

ひとりの女の人が路地を必死に走っていた。

白いワンピースを着て、ツバの広い白い帽子を被っている。

腰元まで伸びる長い黒髪が、激しく揺れていた。

女の人
は走りながら、何
度も後ろを確認する。

誰かから逃げてい
るようだ。

路地を曲がり、さら
に曲がる。

だが次の瞬間、女
の人は目を大きく見
開いた。

袋小路になっ
ていたのだ。

女の人
は焦る。周りは家の
塀があり、逃げ場
はない。

そのとき、男
の人たちの声
がしてきた。

「こっちに行
ったZ E !」

「今度こそ逃
がさないY O !」

それを聞き、女
の人はパニック
状態になる。それ
でも、目の前
にある塀をじ
っと見つめ
た。

刹那、二人
の男が袋小路に
駆け込んで来た。

小太りの青年
と、細くてメガ
ネをかけてい
る青年だ。

二人は袋小路
を見て、目を
パチクリさせ
た。

そこには、誰もいなかったのだ。

「そんな。こっちに行っただけだZ E!」

「ああ、逃げる場所なんてどこにもないY O!」

二人は、スマホを持っている。

スマホの画面には袋小路が映っていて、動画を撮っているようだ。

「ほかの場所を探そうZ E!」

絶対に捕まえてやるY O!」

二人はスマホで動画を映しながら、来た道に戻って行った。

……ポ。

かすかに声がした。

袋小路の塀の向こうに、木が見える。その木の枝が揺れていた。

ポ、ポポ。

木の陰から、先ほどの白い帽子を被った女の人が姿を現した。

どうやらとつさに塀を乗り越え、庭に隠れたようだ。

女の人は塀の上からそっと顔を出し、二人がいなくなったのを確認すると、安堵の表情

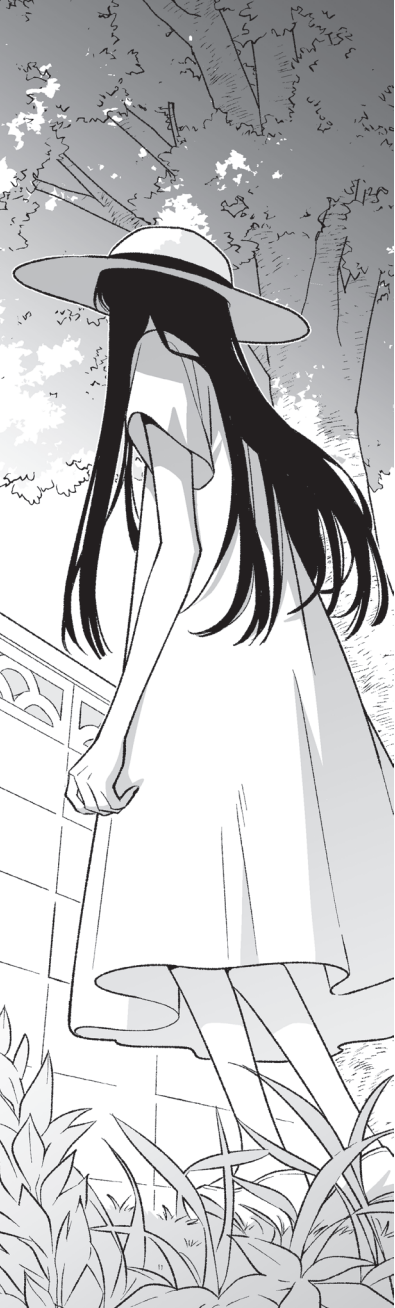
を浮かべた。

だが、その姿は妙だ。

塀は二メートルほどの高さがあったが、女の人の顔はおろか上半身まで、塀の上からはつきりと見えていたのだ。

何かを踏み台にしているわけでも、ジャンプをしているわけでもない。

女の人は、ただその場に立っているだけだ。
風が吹き、長い黒髪が揺れる。



女の人は風に飛ばされないように、被った白い帽子を手で押さえた。

その手は、驚くほど長い。

長いのは、手だけではない。足も信じられないほど長い。

女の人は塀よりも、はるかに背が高かった。

ポ、ポポポ……

それは、人間の言葉ではなかった。

目撃された怪

「はあ、まさかこんな点数になるなんて」

翌日の昼休み。

琴葉は六年二組の教室にいた。

自分の席に座り、手には四時間目に行われた算数の小テストがある。

点数は、六十点だ。

「琴葉ちゃん、どんまい。そういうときもあるよ」

クラスメイトで親友の森永夏純が笑顔で言う。

「そうそう。僕なんか三十五点だし」

同じくクラスメイトの服部和也が、自分の小テストを見せながら笑った。

二人とも琴葉を励ましてくれているようだ。

そんななか、琴葉のそばに立っていた光一郎が、ガツクリと肩を落とした。

「僕の教え方が悪かったんだ……」

光一郎は悔しそうな顔で、拳を強く握り締めている。

「琴葉ちゃん、昨日あれだけ頑張って勉強したのに。それなのに僕のせいで」

「だから違うってば。教え方、すごく上手だったよ」

琴葉はフオーするが、正直、瑚江のことばかり考えていて、光一郎の教え方が上手な

のかどうかはよくわからなかった。

けれども、必死に教えようとしてくれたのは事実だ。

琴葉は彼に感謝していた。

すると、それを聞いていた夏純が、琴葉と光一郎の顔を交互に見た。

「もしかして琴葉ちゃん、光一郎くんに昨日勉強教えてもらったの？」

「え、うん、そうだけど」

「どこで教えてもらったの？ 図書館とか？」

「ええっと、私の部屋だけど」

「ラブラブすぎる〜！」

夏純はニヤニヤしながら琴葉に顔を近づけた。

「琴葉ちゃんって奥手だと思ってたけど、けっこう積極的なんだね！」

「積極的ってあのねえ」

「なんだよなんだよ、二人は付き合ってるのか？？」

和也も興奮ぎみに話に加わってくる。

以前、トイレの花子さんを探しているとき、琴葉が光一郎と一緒にいるところを見かけ

て和也は同じようなことを言ってきた。

「お母さんといい、どうしてみんなそう思うのよ！」

光一郎と付き合っていると言われることは嫌じゃない。でも、本人の前で言われるのはさ

すがに恥ずかしい。

一方、光一郎はガックリ肩を落としたままで、夏純たちの話をまるで聞いていなかった。

「光一郎くんも、いつまでも落ち込まないの！」

「いや、だけど」

「今度教えてもらったら絶対に百点取るから。だから自信持つて」

「百点!? 琴葉ちゃん、すごい！ 僕、頑張るよ！」

「いや、頑張るのは私だし！」

夏純たちにもあきれるが、真面目すぎる光一郎にもあきれる。

だが、とりあえず光一郎は元気になってくれたようだ。

そこへ、学級委員長の瀬戸由加里がやって来た。

「夏純ちゃん、ちよつといい？」

「どうしたの？」

由加里はなぜか妙な表情をしている。

「夏純ちゃんに教えてもらいたいことがあるの。都市伝説の怪人のことなだけど」

「都市伝説の怪人??」

夏純は、おまじないや都市伝説が大好きだ。

そのため、由加里は話を聞きたいと思ったようだ。

「だけど珍しいね。由加里ちゃん、そういう話好きだっけ？」

「うーん、好きとか嫌いとかじゃないんだけど、友達が昨日不思議な人を見かけたっていうの」

「お、どんな人だったの??」

和也が興奮しながら尋ねた。和也もそういう話が大好きなようだ。

一方、琴葉は光一郎を見た。

光一郎はうなずき、由加里のほうに顔を向けた。

「僕にも、その不思議な人の話教えてくれるかな？」

その人は、怪を見た可能性がある。琴葉と光一郎はそう思った。

由加里の話によると、最近通い始めた絵画教室で、中学一年生の女の子の友達ができたらしい。

その彼女が、昨日絵画教室に通う途中、不思議な女の子を見かけたのだという。

「その女の子、信じられないぐらい背が高かったんだって」

由加里の友達は、そのとき横断歩道を渡っていた。

その横断歩道の向こうに、女の子が立っていたという。

「その女の子、横断歩道の信号機に頭がつきそうになってたらしいの」

「信号機に？」

「あれってすごく上についてるよね？」

夏純と和也が同時に驚く。

由加里はうなずくと、話を続けた。

「私も絵画教室でその話を聞いた後、家の近くの信号機を見てみたの。二メートル五十センチぐらいの高さがあったから、多分、友達が見たのも同じぐらいの高さだと思う」

「女の子は、それと同じぐらいの身長ってこと??」

琴葉は戸惑うと、

「それってまさか……」

と、光一郎がつぶやいた。その怪に心当たりがあるようだ。

しかし、由加里が言った次の言葉で、光一郎は神妙な顔つきになった。

「その人、友達に見つかると、すぐに逃げちゃったらしいの」

「逃げた、だって?」

どうやら思っていた怪とは違ふようだ。

一方、和也と夏純はその話を聞き、さらに驚いていた。

「そんな背の高い女の人なんて、この町にいないよな？」

「うんうん、見たことない。都市伝説の怪人かも」

由加里も彼らの話を聞きながら、改めて恐ろしく思い、ぐくりと唾をのみ込んだ。
そんな彼女に、光一郎が話しかけた。

「瀬戸さん。その友達に話を聞くことはできるかな？」

「え、ええ、できると思うけど」

「光一郎くんも都市伝説に興味があるんだ」

夏純が意外そうな表情で言う。

「それが、僕の仕事だからね」

「仕事??」

光一郎が何を言っているのかわからず、夏純たちはキョトンとする。

琴葉はそれを見て、あわてて話に割って入った。

「ええっと、とりあえず、放課後その人に話を聞きに行こうよ。そのほうが由加里ちゃん

も安心できるでしょ」

怪が本当にいうことや、怪を帰すために活動している怪師を説明するのは大変だ。だが、情報を聞き出す必要がある。

「そうね。私も彼女が心配だし、そうしましょう」

琴葉たちは、学校帰りに由加里の友達に会うことにした。

放課後。

琴葉と光一郎は、由加里たちとともに友達の家へと向かった。

彼女は陣内菜奈といい、年上だが気さくで、由加里はすぐに仲良くなったのだという。

「都市伝説の怪人と遭遇した人ほんとに会えるなんて、私、生きててよかったかも」

「僕も。こんな経験初めてだよ」

夏純と和也は怖がりながらも興奮しているようだ。

「私は、何かの見間違えだと思っただけ。そういうのほんとにいるのかな」
先頭を歩く由加里が不安げにつぶやく。

（三人とも、実際に怪に遭遇しているんだけどね）

琴葉は、彼らを見ながらそう思った。

夏純はテケテケに、由加里は赤マントに、和也はトイレの花子さんに遭遇していた。だが、怪が元の世界に帰ったため、その記憶が消えたのだ。

「ここよ」

やがて、住宅地の一角で、由加里が立ち止まった。

目の前に大きな家がある。菜奈の家だ。

「そう、あの話を聞きたいのね」

由加里から説明を受けた菜奈は、琴葉たち五人を自分の部屋に招いた。

ちょうど学校から帰って来たところらしく、制服のままで出迎えてくれた。

「急に来ちゃってごめんなさい」

由加里が謝ると、菜奈は「ううん」と笑顔で答えた。

「お話を聞いてくれるだけでもうれしいよ。お兄ちゃんなんて、『そんな女の人いるわけない、お前』歩きながら寝ちゃって夢でも見たんだよ』って言ってたもん」

学校の友達もともに話を聞いてくれなかったらしい。

「心配してくれたのは、由加里ちゃんだけだよ」

菜奈は「ありがとう」とほほ笑みながら礼を言った。

部屋にはさまざまな人や動物の絵が飾られている。すべて菜奈が描いた絵らしい。

琴葉は「すごい」と絵を見て感心する。

「菜奈さんは、絵画教室でもいちばん絵が上手なのよ」

由加里はそんな菜奈に憧れて、絵の勉強をしているらしい。

菜奈は絵を褒められて照れ笑いを浮かべるが、すぐに真剣な表情になった。

「それで、あの女の人のことなんだけどね……」

全員が菜奈のほうを見る。

菜奈は、机の上に置いてあったスケッチブックを手にとった。

「昨日、お兄ちゃんが全然信じてくれなかったから、その人を絵に描いて見せたの」

それでも、兄は信じてくれなかったらしい。

菜奈は「これよ」と言って、スケッチブックに描かれた絵を見せた。

そこにはツバ広の帽子を被り、ワンピースを着た、髪が腰元まで届くような手足の長い女の人が描かれていた。

となり横断歩道の信号機も描かれている。背はその高さと同じぐらいだ。

「帽子とワンピースは白色だったわ」

「これが都市伝説の怪人なのね。夏純ちゃん、どういう怪人かわかる？」

菜奈の言葉を聞き、由加里は夏純に尋ねた。

夏純は頭をかしげた。

「こんな怪人、知らないかも」

夏純は都市伝説が好きだけれども、何でも知っているわけではない。

すると、光一郎がスケッチブックを手に取った。

「もしかしてとは思っていたけど、やっぱり、こいつだったのか」

「光一郎くん、その怪を知ってるの？」

琴葉の言葉に光一郎は大きくうなずき、怪の名前を言おうとした。

そのとき、部屋のドアが勢いよく開いた。

「菜奈！ スマホの充電バッテリー貸してくれ！」

制服を着た体格のいい男の子が部屋に駆け込んで来た。

「お兄ちゃん」

菜奈の兄で高校生の陣内信宏だ。

「昨日充電するの忘れててさ。残り十パーセントなんだよ」

信宏は棚に置いてあった携帯用の充電バッテリーを手にすると、そのまま部屋を出て行くとした。

「絶対に見つけてやる。——『八尺様』を！」

「八尺様??」

琴葉たちが聞き慣れない名前に戸惑う。

だが、光一郎だけは違った。

「あれが、今どこにいるのか知ってるんですか！」

光一郎はすごい剣幕で信宏に迫った。

「ちよっと、光一郎くん、いきなりどうしたの？」

琴葉があわてて尋ねると、光一郎が答えた。

「陣内さんが見たという背の高い女——、その名前こそが、八尺様なんだ！」

しばらくして。

琴葉と光一郎は、道路を歩いていた。

「ねえ、光一郎くん、ほんとに八尺様は危険な怪なの？」

前には、充電バッテリーを差したスマホを持った信宏が歩いている。

「ほんととは、彼にも家にいてほしかったけど」

光一郎は神妙な顔つきでそう言った。

光一郎は先ほど、夏純たちに今すぐ家に帰るように言ったのだ。

八尺様は凶暴な怪で、人を見るときに襲いかかって来るらしい。

とくに子供が嫌いらしく、子供を見るだけで見境なく攻撃して来るという。

光一郎は、信宏にも家にいるように言ったが、彼は聞き入れてくれなかった。

「絶対に動画を撮って、バズらせてやるんだ」

信宏は歩きながら、スマホを見て意気込む。

彼はよく動画を配信しているらしい。

動画が話題になってバズると、それだけでクラスの人気者になれるという。

今まで、ダンス動画やチャレンジ動画、ドッキリ動画にベツト動画と、ありとあらゆる

種類の動画をアップしてみた。

しかし、まったくバズらなかったそうだ。

「今回はみんなが注目する。八尺様の動画さえ撮れば絶対に！」

信宏は八尺様の動画を撮り、人気者になりたいと言った。そのため、家にいることを拒んだのだ。

「だけど、どうして急に八尺様がいるって信じたんですか？」

琴葉はそれが疑問だった。

菜奈の話によると、信宏はまったく信じていなかったのだ。

「それに、八尺様の名前まで知ってるなんて」

すると、信宏がチラリと琴葉たちのほうを見た。

「みんなが言ってたんだよ。本当に二メートルを超える女を見たって」

信宏は菜奈の話をまったく信じなかったが、今日学校に行くと何人もの生徒が同じように目撃していたという。

「となりのクラスの生徒が、それはたぶん八尺様だって言ったんだよ」

どうやら、夏純と同じように都市伝説が好きな人物がいたらしい。

信宏の学校では八尺様の話で持ちきりになった。

「君たちも危ないと思ってるんなら、さつさと家に帰ったほうがいいよ。俺は八尺様を見つくるまで帰るつもりないから」

信宏はそう言うのと、意気揚々と歩いて行った。

「彼が危険な目に遭わないようにしないと」

光一郎は、彼を守りながら八尺様を探すしかないと考えていた。

「ひとつ疑問があるんだけど」

琴葉はふと、光一郎に話しかけた。

「菜奈さんが言うには横断歩道で見かけたとき、八尺様はすぐに逃げちゃったんだよね？」

「ああ、それは僕も不思議に思っていた。八尺様は凶暴な怪のはずなんだ。逃げるなんてあり得ないと思う」

背の高い女だと聞いても、菜奈が描いた絵を見るまでそれが八尺様かどうか光一郎が確信を持てなかったのは逃げたと聞いたからだ。

「凶暴な怪なのに、凶暴じゃないのかもしれないかあ」

琴葉は、最初に出会ったテケテケを思い出した。光一郎はテケテケのことも凶暴な怪だ

と思っていた。

だが、実際は大人しい怪だったのだ。

「今回もそうかも」

琴葉はそれを光一郎に伝えようとした。

ブウウ、ブウウ……

刹那、光一郎のポケットの中からバイブ音が響いた。

光一郎はハッとすると立ち止まり、ポケットからスマホを取り出し、電話に出た。

「はい。光一郎です、——父さん」

電話の相手は、光一郎の父親のようだ。

「はい。そうです。この町に八尺様が現れたみたいで。はい。僕と遠野琴葉さんの二人でできます。必ず八尺様を元の世界に帰します」

光一郎は姿勢を直し、宣言するかのように父親に言う。

その姿はまるで師匠と弟子だ。

光一郎が昨日言っていたように、親と親しくしたことはないのだろう。

やがて、電話を切った光一郎は、自分に言い聞かせるかのようにつぶやいた。
「今度こそ必ず……」

「光一郎くん……」

光一郎は、怪婦師として一人前であることを証明したいのだろう。

光一郎は小さくうなずくと、再び歩き出そうとした。

「えっ」

見ると、前を歩いていた信宏がいない。

「信宏さん、どこに行っただの？」

「え？ あ、ほんとだ。知らない間に行っちゃったのかも」

二人は急いで信宏を追いかけようとした。

「うおおおお！」

前方の曲がり角のほうから大きな声がした。

信宏の声だ。

「まさか、八尺様と遭遇したんじゃない?」

琴葉たちは、あわてて道路を曲がった。

すると、信宏が前方にいた。

彼の前には、小太りの青年と、細くてメガネをかけている青年が立っていた。

「八尺様じゃない?」

「ああー!」

声をあげたのは、琴葉だ。

「琴葉ちゃん、どうしたの? 八尺様を見つけたのかい??」

「そうじゃないよ、あの人たち、マルサンカクスだよ!」

「え?」

マルサンカクスとは、人気の大学生動画配信グループだ。

「どうしてこんなところ??」

琴葉が驚いていると小太りの青年のほうで顔を向け、ニヤツと笑った。

「やあ、君たちもおれたちのサインが欲しいなら、色紙をちゃんと持ってくるんだZE」

「ZEが出たー!」

信宏が興奮する。

「琴葉ちゃん、ZEって何だい？」

「たしか、マルサンカクーズの丸井さんの口癖だったような。もうひとりの三角さんのほうは」

細くてメガネをかけている青年がニヤツと笑った。

「オイラの口癖は、言葉の最後にYOってつけることだYO！」

「生YOが聞けた」

信宏はますます興奮して満面の笑みを浮かべた。

「そんなにうれしいことなのかな……？」

普段動画をまったく見ない光一郎にはわからない感覚だ。

琴葉も会えて驚いたものの、さすがに

信宏の興奮ぶりには引いてしまった。

そんな琴葉たちをよそに、信宏は丸井たちの握手を求めた。

「俺陣内信宏っていいです！ いつも動画見てるっす！ めちゃめちゃ大ファンっす！」
どうやら先ほど大きな声をあげたのも、彼らを見つけたからだったようだ。

「だけど、この町で何してるんすか??」

信宏が不思議に思うと、丸井がニヤツと笑った。

「この町に、八尺様がいるって聞いたんだZE」

マルサンカクーズの二人には、毎日のようにファンからいろいろな情報が寄せられるらしい。

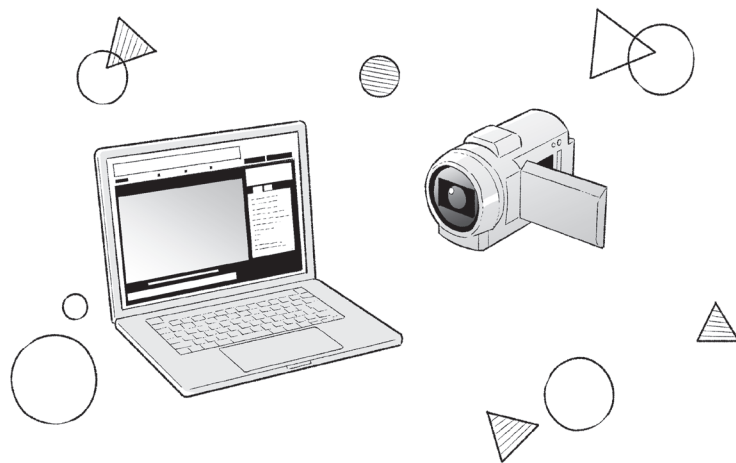
昨日、この町で八尺様を見かけたという情報があったのだという。

「ちょうど、近くの町で美味しいお店の紹介動画を撮ってたんだYO。そんなとき、八尺様が出たってメッセジをもらって。面白半分で探してみることにしたんだYO」

「そうしたら、本当に八尺様に出くわしたんだZE」

「出くわした??」

マルサンカクーズの二人はスマホで動画を撮りながら、八尺様を必死に追いかけたのだ



という。

「だけど、動画で撮る前に逃げちゃったY O」

「だから、今日こそは絶対に捕まえてやるんだZ E」

「すごいすごいすごい！」

それを聞き、信宏は満面の笑みを浮かべた。

「俺、お二人を案内するっす！ 町にくわしい奴がいたほうがいいでしょ！？」
もし八尺様を見つけたら、俺も協力者として動画に出してほしいっす！」

「おお、もちろんだZ E！」

「信宏くん、一緒に特ダネ動画をゲットしてバズっちゃおうY O！」

「おおお、絶対バズりたいっす！」

マルサンカクーズの二人が駆け出す。信宏もそれに続く。

「あ、ちよつと！」

「琴葉ちゃん、僕たちも行こう！」

「うん！」

琴葉と光一郎はあわてて彼らを追った。

怪のいる場所

「うーん、全然いないっすねえ」

琴葉たちは、信宏たちとともに町のあちこちを探した。

しかし、八尺様の姿はどこにもなかった。

一同は駅前までやって来た。

「昨日は結構目撃されてたんすよお」

信宏の言葉に、マルサンカクーズの二人はうなずく。

「どこかに隠れてるかもしれないY O」

「ああ。隠れてる場所さえわかれば、スマホで撮影してやるZ E」

二人は互いにスマホを構え、ニヤツと笑った。

すると、光一郎が彼らの前に立った。

「これ以上、八尺様を刺激するのはやめてください」

光一郎は二人をにらむように見つめる。

「何だい、君は特ダネを独り占めする気がYO？」

三角がメガネを指でクイッとあげながら、そう尋ねた。

「そんなことするわけがないでしょ」

光一郎は真剣な表情できつぱりと答えた。

「僕は、あなたたちの心配をしているんです。八尺様がどうしておびえているのかはわからない。だけどあれは凶暴な怪です。変に刺激したら、襲いかかってくるかもしれない。きつとあなたたちは大怪我をしてしまう」

光一郎は町並みを眺めた。

「僕は、怪を元の世界に帰す怪師です。だけど、怪を帰すことだけではなく、人々が怪によって不幸にならないように食い止めたい思いもあります。だから、あなたたちに怪我をしてほしくないんです！」

「光一郎くん……」

琴葉は、光一郎の思いを知り、大きくうなずいた。

「私も同じです。今すぐどこかに避難したほうがいいと思います！」

「き、君たち何だYO」

「怪師なんて聞いたことないZE」

「いいから、これ以上探すのはやめてください」

光一郎は丸井と三角の持っているスマホを降ろさせようとした。

そのとき――、

「あつ！」

と、信宏が声をあげた。

「そうだ、あそこなら誰にもバレずに隠られるかも！」

「えっ!? どこだYO？」

「オレたちに教えるんだZE！」

丸井と三角は光一郎を押しのけ、信宏のそばに駆け寄った。

「わっ」

「光一郎くん！」

琴葉はよろけた光一郎のそばに行く。

一方、信宏は興奮ぎみにその場所を丸井たちに教えた。



「駅から少し行ったところに廃工場があるんすよ。あの辺りは普段から人があんまり近づくなくて。しかも、工場の扉は鍵がしまっていないんすよ」

「おお、そこなら隠れることができそうだZ E!」

「行ってみようY O!」

「だからそういうのは危険で——」

「——うるせえっ!」

注意した光一郎に、丸井と三角は同時に怒鳴った。

「こっちは切羽詰まってるんだ!」

「この動画で、トップ配信者に返り咲かなきゃいけねえんだ!」

二人はZ EもY Oも言わず、眉間にしわを寄せながらすこむ。

「信宏くん、今すぐその場所に案内して!」

「絶対動画に撮ってやる!」

「は、はいっす!」

信宏はその迫力にたじろぎながらも、廃工場のほうへ走って行った。

「そんな」

琴葉は彼らの態度に戸惑う。

光一郎は心配して言ったのに、まったく理解してくれなかった。

「このまま放っておくわけにはいかない。彼らが怪我をする前に、八尺様を元の世界に帰すんだ」

「あんな人たちでも助けないといけないの?」

琴葉の言葉に、光一郎は「当然だよ」とはつきりと答えた。

「どんな人だろうが、怪のせいで不幸になるのを、僕は黙って見ているつもりはない。怪が人々を不幸にするのを食い止める。それが怪師の仕事だ!」

光一郎は怪師の仕事に強い使命感を持っている。

琴葉はそんな彼の力になりたいと心の底から思った。

そのとき、背後から声がした。

「あら、琴葉」

見ると、琴葉の母親が駅の改札口のそばに立っている。

仕事が終わって、電車に乗って帰って来たのだ。

「そんなところで何してるの？」

「あ、ええつと」

「まさか、光一郎くんとデート!?」

「そんなじゃないつてば!」

「またまた、別に隠さなくてもいいのよ。あ、そうだ。琴葉から聞いたんだけど、光一郎くんは親御さんのお仕事の関係で、ひとりで暮らしているのよね？」

「は、はあ」

「だったら、今夜夕食を一緒に食べましょうよ。今からスーパーに行くところだったの。

おばさんお料理上手よ。いちばん得意なのはハンバーグ。一緒に食べましょう!」

母親は、駅前にあるスーパーのほうへ歩き出そうとした。

だが、琴葉が怒鳴った。

「お母さん、いい加減にして!」

「琴葉……」

「私たちは今から行くところがあるの!」

「こんな時間からどこに行くのよ？」

「それは、あの」

「廃工場です」

光一郎が母親の目をまっすぐ見て答えた。

「光一郎くん、わざわざ言わなくていいんだつてば」

「え、そうなのかい？」

琴葉がしまったという顔をしていると、母親が急に真面目な表情になった。

「ちよつと、あそこは人通りもないし、こんな時間から行くのは危ないわよ」

「それはわかってるんだけど、行かなきゃいけないの」

「どうして??」

「それはええつと、ああんもう、とにかくご飯は適当でいいから!」

「琴葉は、「すぐ帰るから」と母親に伝えと、光一郎の腕を引っぱってその場から走り出した。」

「琴葉ちゃん、いいのかい??」

「こんなときにお母さんに構ってる暇ないよ!」

母親は相変わらずうつつとうしい。今は信宏たちのほうが重要だ。

「急がなきゃ!」

琴葉たちは走るスピードを上げた。

「ここだよ」

やがて、琴葉と光一郎は、廃工場の前にやって来た。

駅からは、歩いて五分もかからない。

しかし、辺りに住宅はなく、帰宅時間帯にもかかわらず人通りもまったくなかった。日が落ち、すでに薄暗くなっている。

「信宏さんたち、もう中に入ってるみたいね」

入り口のさび付いた鉄の門が少しだけ開いている。信宏たちが開けたのだろう。

「彼らより早く八尺様を見つけ出さないと」

二人は工場の敷地に入ろうとした。

「そっちに逃げたっす!」

突然、工場の中から信宏の声が響いた。

「まさか!」

八尺様をすでに見つけたのかもしれない。

琴葉たちはあわてて門をくぐった。

もう一体の怪

工場の中では、信宏たちが必死に走っていた。

「どっちに行っただY O!」

「そっちっす!」

「今度は逃がさないZ E!」

三人はスマホで動画を撮りながら、工場中を走り続ける。すると一瞬、人が横切った。

姿は人そっくりだが、普通の人とはまったく違う。

工場は機械がそのまま放置されているが、その人物は、それらの機械よりはるかに背が高かったのだ。

「いたZE、八尺様だ！」

ポオオ、ポポポオオ……

ツバ広の白い帽子を被った八尺様が、長い手足を必死に動かし、信宏たちから逃げた。

八尺様は右側にある出入り口、鉄の扉のほうへ逃げようとする。

だが、行く手を丸井がふさいだ。

それを見て、八尺様は左側にある鉄の扉のほうへ走る。

しかし、その扉の前にも三角が現れ、ふさいでしまった。

丸井と信宏も、取り囲むかのように近づいて来る。

ポオオオ……

八尺様は壁際に追い詰められ、その場にうずくまってしまった。

「ほんとに、いたZE」

「信宏くん、ナイスだったYO」

「力になれてうれしいっす！」

丸井と三角はうずくまり震える八尺様を見てニヤつと笑う。

「スミ、これは特ダネだな」

「ああ、マル。オイラたち、最近全然バズってなかったもんな」

「これでオレたちも、人気動画配信者に返り咲けるはずだ！」

二人はスマホを向けると、ゆっくりと八尺様を動画で撮ろうとした。

「やめろ！」

丸井たちが振り返ると、少し離れた場所に光一郎と琴葉が立っていた。

ようやく丸井たちのもとへたどり着いたのだ。

「何だ、また君たちか」

「オイラたちの邪魔すんなって」

丸井と三角はあきれながらも苛立つと、信宏に声をかけた。